

## タゴールとその周辺

東京外大拠点(FINDAS) 第4回研究会  
「現代、タゴールを読む」広島大学・外川昌彦

### 1. 日本でのタゴール研究

- (1) 森本達雄『死生の詩』2002、内山真理子『迷い鳥たち』2008、川名澄『螢』2009
- (2) 我妻和男『タゴールー詩・思想・生涯』(麗澤大学出版会 2006)
- (1) 丹羽京子著、『タゴールー人と思想』(清水書院 2011)

### 2. タゴール評価の逆説、

- (1) インド政府が評価するタゴール

「タゴールは、1913年にアジア人で初めてノーベル賞を受賞し、インドが生み出した最も有名な文化人の一人です。彼は日本にも大変関心が深く、日本を訪れ、岡倉天心との親交を築きました。」 ICCR Letter on Tagore Chair, January 20, 2011

→ タゴールの評価は、タゴールの周辺でなされる。ベンガル人にとっての評価は自明。しかし、それが読めない多くの人には、ノーベル受賞作家という前提から議論される。

- (2) 二つの『ギタンジョリ』

・ベンガル語の音の美しさは翻訳不可、しかしノーベル賞作品は、英文の『ギタンジョリ』  
・William Radice は、「タゴールの翻訳よりも、イギリス人の翻訳の方が優れている」

→ タゴールのオリジナルよりも素晴らしい翻訳とは？

- (3) アマルティア・センのタゴール評

「バングラデシュやインドでの、今なお深く有意義で多面的な現代思想家としてのタゴールという見方と、同じことばかり繰り返している遠い国の精神主義者という欧米でのイメージとのあいだにある落差」『議論好きなインド人』

→ 西洋で作られ出された、東洋の神秘主義者タゴールのイメージ。同時に、西洋での評価や歴史的交流が、タゴールを単なる詩人以上の存在とする。

日本でも類似の現象が指摘される。

### 3. 周辺の問題

- (1) 岡倉天心：「タゴールとの親交」の中身

・1913年2月、ノーベル賞受賞前のタゴールの作品に岡倉は関心を示していない。また、1916年の初来日の講演で、タゴールは岡倉に言及しなかった。

→ 「親交を築いた」の中身は？

・タゴールは、シャンティニケトンの学園に岡倉を招いていた。また、岡倉は、1903年2月、ボストンの自宅にタゴールを招いてスキヤキを御馳走した。すべての交流は、ノーベル賞受賞前(11月)。

→ タゴールと岡倉の交流の経緯を洗い直す必要。

- (2) 堀至徳：タゴールの学園の最初の外国人留学生

・岡倉の勧めを断り、インドに残って堀が探究しようとしたものは。

→ 堀のシャンティニケトン滞在の意図とタゴールとの交流。

### (3) 野口米次郎

1935年12月にガンディーと会見した野口は、次のように言われる。：「私の日本人へのメッセージは、詩人タゴール博士からあなたがたが受け取ったものに含まれている。彼のメッセージには、私たちが与えることのできるあらゆるメッセージが含まれている。」

野口はそれに対して、「その言葉の意味が私に明瞭でなかったが、恐らく彼はタゴールが常に抱いている日本の物質主義への反対を意味したのであろう。」『印度は語る』1936年

実際には、タゴールは、早い段階から日本の軍国主義化に警鐘を鳴らしていた。『日本紀行』(1919年)では、「インドとヨーロッパのほうが、日本とヨーロッパよりもはるかに近い」とも述べている。

→ 日本とインドとの認識の落差が両者の論争の背景。論争は、1938年8月。

## 4. 周辺から見るタゴール

### (1) 「アジアは一つ」の着想

→ ニヴェディタの協力、岡倉のインド体験、ヴィヴェーカーナンダの日本体験とアドヴァイタ。ベンガル・テロリストと『東洋の覚醒』の問題。

インド体験を通して、岡倉はそのアジア認識を広げ、インドの若者に向けたメッセージを『東洋の覚醒』にまとめる。しかし、帰国後はむしろ、その視線はアメリカに向かう。日露戦争とともに刊行された『日本の覚醒』は、欧米に日本の立場への理解を広く訴えることに成功する。インド人を鼓舞する姿勢（東洋の覚醒）から、欧米に日本への理解を求める立場（日本の覚醒）へ。

→ 西洋に対する両義的な態度。これと対比されるタゴール。

### (2) 「東西文明の融合」

・西洋近代とヒンドゥー文明の対比（「東と西の文明」1901）から、「東西文明の融合」（1908）への変化。

→ タゴール学園の創設、妻や子供の死、ベンガル分割令、政治活動とそこからの撤退など。これらの経験を通じた普遍的な人間性や宗教への探究が、東西の矛盾を克服する視点を導く。最終的に、それが『ギタンジョリ』の英語翻訳をもたらす。

### <参考文献>

春日井真也

1971 「インドと日本（四）—堀至徳の思想と生涯」『佛教大学研究紀要』55号  
セン、アマルティア

2008 『議論好きなインド人—対話と異端の歴史が紡ぐ多文化世界』  
佐藤宏・栗屋利江訳 明石書店

Bharucha, Rustom

2006 *Another Asia*, Oxford University Press.

Hay, Stephen N

1970 *Asian Ideas of East and West: Tagore and His Critics in Japan, Chinese and India*. Harvard University Press.